

道徳科における“学び”

— 令和の日本型学校教育とこれからの道徳(科)教育 —

2023年2月23日(祝・木)に日本道徳教育方法学会第7回オンラインセミナー「道徳科における“学び” — 令和の日本型学校教育とこれからの道徳(科)教育 —」が行われました。

今回のオンラインセミナーの企画は、2022年1月に発行されたニューズレター第13期第7号特集「道徳科における“個別最適な学び”」を起点としています。この特集では2021年1月の中央教育審議会『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(答申)で示された“個別最適な学び”が道徳科においてどのように捉えられるかについて6人の会員からご論攷を頂戴しました。“個別最適な学び”に対する様々な立場や観点からの提案や課題提起をもとに、令和の日本型学校教育における道徳科のあり方をより一層考えていく契機となることを企図した特集でした。

さらに2023年1月発行のニューズレター第13期第10号では「道徳科における“学び”を考える」という特集テーマを設定し、近年、学校教育や授業改善に関わって参照されることの多い「真正の評価」論や「自己調整学習」論などと道徳科授業との関わりをどう捉えるかについて、5人の会員よりご論攷をお寄せいただきました。このうち3人の会員に第7回オンラインセミナーへのご登壇をお願いして、今、学習論と道徳科授業とがどのような関係にあるのか、これからの道徳科授業を考えるにあたってどのような関係を築いていけばよいかを探っていくこととしました。

当日は谷田増幸会長の開会の挨拶の後、眞榮城善之介会員、尾崎正美会員、宮川幸奈会員より、ニューズレターで示された趣旨にそれぞれの主張点を交えながら提案していただきました。司会の上地完治会員による論点整理と登壇者によるディスカッションをふまえて、参会くださった会員の皆様を交えて議論を行いました。堺正之副会長の閉会の挨拶では、上記の経緯を含めた今回のオンラインセミナーの要点と、今後の展望をまとめていただきました。

参加者は45人(すべて会員)でした。参加者アンケートでは、今回のテーマの発展可能性に関するアイデアをお寄せいただきました。そのいくつかをご紹介します(一部表現を変えているところがあります)。

- ◇ 心理学や教育方法学から見た「道徳科における“学び”」
- ◇ 各教科等の評価の観点における自己調整的な側面と道徳科における評価の異同
- ◇ 道徳科授業の「ねらい」
- ◇ 自己調整学習と「自己の(人間としての)生き方を考える」こととの関係をどう捉えるか
- ◇ 道徳科指導の「質的転換」

最後になりましたが、ご登壇くださった眞榮城会員、尾崎会員、宮川会員、上地会員をはじめ、ご参加いただいた会員の皆様、開催にあたってご協力くださった皆様に御礼を申し上げます。今回のオンラインセミナーでの議論が継続的に発展していくことを願っております。

なお、ニューズレター特集「道徳科における“個別最適な学び”」ならびに「道徳科における“学び”を考える」は学会公式 Web サイトに掲載されています。あわせてご覧ください。

第7回オンラインセミナー企画担当
情報委員会 小林 万里子（文部科学省）

提案者より

これからの道徳（科）教育の展望

眞榮城 善之介（沖縄県那覇市立真和志小学校）

先日のオンラインセミナーにおいて主張した点を改めて簡潔に述べると以下になります。

- ・「考え議論する道徳」や「個別最適な学び」といった新たな学びのスタイルが登場した根底に「真正の学び」がある。
- ・「個別最適な学び」に注目が集まるが、同様に重視されている「協働的な学び」はこれまでも、そしてこれからも道徳（科）において不可欠である。
- ・ただしこうした学びのスタイルが、方法論として固定化されたり目的化されたりすることは避けなければならない。
- ・共通の教材や価値から自我関与しながら一人一人が思考する過程は「学習の個性化」であり、そのために実態に応じた指導（手立て）を工夫するのが「指導の個別化」と捉えることができる。よって道徳（科）教育における「個別最適な学び」は可能である。

道徳（科）教育においては、いかにしてよりよく生きるための基盤となる道徳性を養うか、教師はその点を目指して様々な手段を講じていると思います。中でも道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習は学習指導要領の目標の中で明確に示されており、最も周知された学習の仕方と言えるでしょう。ではどのようにして道徳的諸価値について理解させることができるのか、どうすれば自己を見つめるようになるのか、そして物事を多面的・多角的に考えさせるためにどうすればいいのか、そのヒントとなったのはセミナーの中で話題にあがった「自己調整学習」や「サーチライト型道徳」だったのではないのでしょうか。

ただし自己調整学習について発表した宮川先生によれば、そもそもの自己調整学習の方途を鑑みれば、道徳科の学びを分析するのにふさわしい枠組みなのかどうかは常に問われるべきだと言うことです。故に道徳科の新たな授業方法（学びのスタイル）としては開発の手がかりと成り得るが、鵜呑みせず慎重を期するべきだと考えます。同じく登壇された尾崎先生が提案された「サーチライト型道徳」も然りです。

なぜなら私を含めた多くの現場の教師は、道徳も道徳以外のことも常に目の前の事象に全力で対応し、かつ早期解決が求められており、すぐに効果を実感できる手立て（方法）を求めて

しまいがちです。つまり「この方法にさえ当てはめておけば大丈夫。」という、手段が目的化してしまうことが多々あり、そこに危機感を覚えるからです。

今回のセミナーを通して強く感じたことは、やはり我々教育者は、時代とともに変化し続け、また予測困難な時代を見据え、教育の在り方について常にアップデートし続け柔軟に対応することが最も肝要だということです。「個別最適な学び」も「自己調整学習」や「サーチライト型道徳」も根幹には子どもの学びを深めることや、時代に応じた資質・能力を高めることを目指しています。ただし十分な検証や議論なくして形骸化した学びのスタイルとならぬよう、今回のセミナーのような議論を重ね、見極めながら試していく必要があるでしょう。



これからの道徳科における学び ～サーチライト型道徳～

尾崎 正美（岡山県瀬戸内市立国府小学校）

今回のオンラインセミナーは、文字通りこれからの道徳科における学びについて、深く考えることができ、私にとって大きな学びとなりました。上地先生の司会のもと、眞榮城先生、宮川先生や参加して下さった先生方のお考えを聞きながら、自分の考えに足りなかったところや見えていなかったところが埋まっていくことを感じました。今回のセミナー上でのこの体験は、自分の目指す「サーチライト型道徳」における探求の仕方に通ずるものがあると感じています。

セミナーでは、道徳科における学びとは何かということを議論する中で、道徳科が目指すものは何なのかという話題にも広がっていきました。道徳科で目指すことは言うまでもなく、子供の道徳性の育成です。ただそれは、教師が教え込んで育てるものではない。子供自身が「よりよく生きたい」という願いをもち、今の自分を見つめて探求していく中で育成していくものだと思います。サーチライト型道徳はその部分を大事にした「個別探求型道徳」です。私はこれまで、自分を見つめることを探求のベースとするうえで、探求過程において自己調整学習の学習過程が参考になるかもしれないと考えていました。それについて宮川先生より、自己調整学習そのものを道徳科へ転用することは難しいとのご示唆をいただき、大変納得しました。確かに、道徳科においては子供一人だけの力で自分の道徳科の学習を方向付け、進めていくことには無理があります。その理由は、眞榮城先生がご説明されたように、道徳性の育成には協働的な学びが不可欠だからという点にあります。人は人によってのみ磨かれる、つまり、自分と異なる考えや似た考えなどの多様な考えに出会うことにより、人は自分の考えを見つめ直してよりよくしていけるのだと思います。ただ、多様な考えに出会う前に自分自身の考えを認知していなければ、出会った考えが自分と似ているのか異なるのか判断ができない。これまでの道徳の学習に弱かったのは、その自分を見つめ続けるという点であると思うのです。サーチライト型道徳では、その点を重視しています。

今回のセミナーを通して、今後、道徳科における学びを考え続けていくために、以下の3点について自分の考えが明確になってきました。

① 道徳科で目指す道徳性の育成には、学習者である子供一人一人が自分を見つめ、よりよい

生き方を探求していく姿勢が必要である。

- ② 自分を見つめるという点において、道徳科の学習で授業者の授業づくりの視点について自己調整学習を参考にすることはできそうである。
- ③ 道徳科の学びでは子供が自分の道徳性を育成していくことを重視するため、学習において多様な考えに出会い考える協働的な学びが不可欠である。

以上の3点をこれからの道徳科の学びを形作るものだと考えれば、子供一人一人の目指す目標と授業者のねらいとの関係をどのように捉えていくのかという点が気になってきます。私は、サーチライト型道徳での探求を子供が目指すよりよい自己の実現に向けての道程であると捉え、授業者のねらいはその道程におけるチェックポイントのような存在であると考えています。私たち教師は、それらのチェックポイントが子供にとって魅力的で意味あるものと成り得るように、授業を考えていかねばならないのだという思いを強くしたセミナーでした。

最後に、本セミナーのためにご尽力くださった情報委員会の方々、ご参加くださった方々に感謝申し上げます。



第7回オンラインセミナーを終えて

宮川 幸奈（熊本学園大学）

本オンラインセミナーに向けて、私は、「令和の日本型学校教育」の理論的背景にもなっている自己調整学習論と道徳科における“学び”のかみ合わない点を中心に、両者の関係について考察しました。オンラインセミナー当日の発表で、ニューズレター第13期第10号の内容を基にしつつ、新たに示した論点は以下の通りです。

- ・道徳科の“学び”において、児童生徒はどの程度目標を意識すべきか
- ・自己調整学習研究は、学習を日常生活から一定程度切り離された、努力を要する活動として想定しているが、これを道徳科に適用するのは妥当か
⇒自己調整学習研究で扱われる個々の概念や観点の中には、道徳科とも深く関連するものがありそうだが（メタ認知、モニタリング、自己効力など）、自己調整学習というパッケージを道徳科の理解のためにどこまで参照すべきか
- ・道徳科において、「多面的・多角的な見方へと発展」させるための方略や、「道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深め」るための方略などを析出できるならば、それと各回の授業で扱う内容項目との関係はどうなるか

当日の議論では、とりわけ道徳科授業における目標の位置づけについて、考察を進めることができました。司会の上地先生からのご質問への回答の中で、私は、典型的な自己調整学習論が想定するように、学習者（児童生徒）があらかじめ自らの学習の目標を意識的に設定すること（プランニング）は、ともすれば道徳科の“学び”の重要な一部をそぎ落とすことになってしまうのではないかという懸念を示しました。それはつまり、児童生徒による事前のプランニングを強調することによって、授業の中で、児童生徒が新たな考え方や見方と出会い、授業の前には思いもよらなかった何かに気付くといったことが起きにくくなってしまっているのではないか

ということです。ただその一方で、授業者が授業のねらいを設定することの重要性については、これまでの道徳教育研究の中でも様々な角度から論じられてきました。フロアを交えた質疑応答の中でも、眞榮城先生・尾崎先生それぞれの、道徳科授業のねらいのとらえ方をお聞きすることができました。それらを踏まえて、道徳科授業において授業者が設定するねらいと、児童生徒がもつ目標との関係について、さらに検討する必要があると考えています（例えば、授業において児童生徒へ「めあて」をどのように提示すべきかなど）。

自己調整学習論は、道徳科の“学び”とそのまま接合できるものではないものの（むしろそのまま接合できないからこそ）、そこで言われる“学習”と比べてみることで、道徳科の“学習”の特徴、構造が見えてくると考えられます。それは、道徳科と他教科との違いを明らかにするということも含むでしょう。当日の議論の中では、尾崎先生が、道徳科におけるプランニングやモニタリングには、学習の仕方に関するものと、人生・生き方全体に関わるものがあるのではないかと整理してくださいました。もともとの自己調整学習研究は前者に焦点を当てていますが、道徳科では後者を見過ごすことはできません。これらのことを踏まえて、自己調整学習に関する知見をどう道徳科に活かせるのか（あるいは活かさないのか）、引き続き考えてみたいと思っています。

さらに、本オンラインセミナーを通して、道徳授業を語る際に使われてきた言葉と、（自己調整学習研究に限らず）心理学などの言葉を適切につなぐような仕事に取り組みたいという、新たな展望を得ることができました。

司会者より

上地 完治（琉球大学）

「道徳科における“学び” — 令和の日本型学校教育とこれからの道徳（科）教育 —」と題して開催された第7回オンラインセミナーは、情報委員会が事前に3回の学習会を開催した上で企画されたという点で、他の回とは異なった特徴を有していました。道徳（科）における学びとは何かという問いは多様な観点から考察可能なため、複数の話者がこのテーマで自由に語る場合、往々にして議論がかみ合わなくなることがあります。その点、今回は、中教審答申「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」において「個別最適な学び」と「協働的な学び」が焦点化された理論的背景を理解するために、事前の学習会で「自己調整学習」論や「真正の評価」論に関する論文を読んだ上で、こうした学習論や評価論を道徳科授業という文脈に落とし込んだ議論がなされました。報告者の眞榮城会員と尾崎会員にはこの議論を踏まえて報告していただき、宮川会員には「自己調整学習」論に関する理解を補強するためにご登壇をお願いしました。この3名の報告がかみ合って、当日は豊かな学びの契機を提供するセミナーとなりました。

最初の報告者である眞榮城会員の報告は、「真正の学び」というキーワードを通して道徳科の「深い学び」を考えるものでした。「真正の学び」の観点から、道徳科の学習とは漠然とした抽象的な価値を取り扱うのではなく、教科書を用いて考えたことを具体的な生活場面という文脈に置き換えて考えることが重要となると眞榮城会員は言います。眞榮城会員にとって、道徳科

における個別最適な学びとは自分の生き方をそれぞれ考えたり、自分にとっての最適解を探すことであり、だからこそ、眞榮城会員の報告ではそうした個別最適な学びを可能にする「協働的な学び」が一層強調されていました。報告の最後に、グループで話し合いをすればいいという「学びのスタイル」の安易な理解に対する危惧が示されていましたが、この危惧と、道徳科における「真正の学び」とは何かという問いについて議論を深めることができなかつたことは、司会者としての反省点です。

続いて、尾崎会員の報告と宮川会員の報告はそれぞれ自己調整学習について触れており、2つの報告をセットで聞くことによって、自己調整学習の理論的理解（宮川会員）と実践的理解（尾崎会員）、道徳科授業における自己調整学習の実践的構想（尾崎会員）とその課題（宮川会員）という、対照的な観点からの考察が可能となりました。

尾崎会員による灯台型道徳とサーチライト型道徳を対比した説明は、尾崎会員の考える従来の道徳授業の課題とその改善の構想を明示するものでした。このサーチライト型道徳では、眞榮城会員とは対照的に「個別最適な学び」が強調されていましたが、尾崎会員によれば道徳科において「協働的な学び」は当然の前提として捉えられており、それを踏まえて今回の報告では「個別最適な学び」に力点を置いた報告をおこなったということでした。そして、サーチライト型道徳に、予見（課題や問いの自覚）・遂行コントロール（自己モニタリング）・自己省察（自己評価）という自己調整学習の3段階が導入可能ではないかという実践的提案がなされました。

宮川会員の報告は、ご自身が述べていたように、教科学習を前提に構築されている自己調整学習と道徳科の学習のかみ合わない部分に焦点が当てられていて、非常に興味深いものでした。学習をどう進めるかというプランニングについては自己調整学習の知見が役立つが、自分の人生をどう生きるか（自分がどうなりたいか）という目標設定やプランニングは道徳科に特有のものであり、これについては教科教育を暗黙の前提とした自己調整学習論はあまり参考にならないということが議論において明らかになりましたが、これは宮川会員の報告を聞くことで整理された論点でした。

フロアとの質疑応答も踏まえて、司会者として改めて考えたことは、教科教育の領域における学習論や評価論などの豊かな研究成果を、道徳科の学びを理解するために積極的に活用すべきだということです。これには2つの意味があって、1つは文字通り学習論や評価論についての先行研究を踏まえて、同じ学習として道徳科の学びを理解することの必要性です。そしてもう1つの意味は、教科教育における成果を「思考の補助線」として利用することで、教科とは異なる道徳科の学びの特質を明確化し言語化することの重要性です。今回のオンラインセミナーでは特に後者の観点から議論の深まりが実感できました。